研究区分	教員特別研究推進　教育推進

研　究 テーマ	反転学習とハイフレックス型の組み合わせによる アクティブラーニング・プログラムの開発				
研究組織	代　表　者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野　雄史
	研究分担者	所属・職名	関西学院大学・教授	氏名	菅原　智
		所属・職名	パルマ大学・教授	氏名	Andrea Cilloni
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野　雄史

講演題目

反転学習とハイフレックス型の組み合わせによるアクティブラーニング・プログラムの開発

研究の目的、成果及び今後の展望

本研究は、教育実践としてハイフレックス型講義と反転学習を組み合わせ、事前学習においてオンライン教材を積極的に活用することで、事前学習の充実を図り、より効果的な講義を模索した。まずオンライン教材としては株式会社 Funda が提供する簿記・会計学のアプリを活用し、事前学習・反転学習に組み入れた。Funda 簿記は、短期集中型の簿記試験対策アプリで、日本商工会議所の商業簿記 3 級と 2 級に対応している。学習コンテンツを利用して自学習を個別の進度で進めることが出来る。また試験対応としての個別問題、模擬試験も実施しており、本試験を突破できる学習能力を効率的に身につけられるのが特徴である。このアプリを、各学生の学習習熟度と授業の進捗に対応する形で学習を進めてもらった。これに加えて、実践的な学習のために有価証券報告書の実際のデータを活用したレポートの作成も学生に求めた。これは、学生たちが企業を選択し（ただし、学生間で選択企業が重複しないための調整は実施）、その企業分析を事前学習・授業中・事後学習で行い、レポートの作成を行った。このように、事前学習を通じた基礎的な知識・技能の習得と、有価証券報告書を活用した企業ケース分析を組み合わせた授業展開を行った。また有価証券報告書の読み取りに必要な関連知識についても授業内でフォローし、個別の学習進捗に合わせたアドバイスを学生に行った。

教育実践の効果を測定するために、会計学総論の初回と最後に会計学に対する意識調査を行った。その調査結果によると、「会計学に対する苦手意識」については、初回時には「苦手意識があり、興味がない」と回答した学生は 10.6%に対して、授業終了時には、7.3%となっており、苦手意識のある学生は約 3 ポイント減少した。「苦手意識はあるが、興味がある」と回答した学生も 20.2%から 25.8%と、約 5%増加した。また学習を通じて、簿記のイメージが変化した学生は 62.9%、レポート作成能力が高まったことを実感した学生は 91.9%と高い数値となった。個別最適化した事前学習と実際の企業ケースを活用した学習には一定の効果があったことが確認できた。

このように本取り組みの一定の効果は確認できたものの、今後の課題はある。一つは、アプリの利用環境により学習効果に差が出る懸念があること、である。これは学生たちが保有しているタブレット、PC などの端末に依拠するところが大きいために発生する。学習環境の統一化をどのようにするのかが大きな課題である。また学生間のモチベーションの差もあり、この点をどのように配慮するか（どこまで配慮するか）も課題としてあげられる。教育の質をさらに高めるためには、学生一人ひとりの学習環境とモチベーションに注意を払うことが重要であろう。令和 6 年度では、この点を改善していく予定である。